

国際児童教育大会

報告



仁科彌生

国際児童教育協会は三月二十九日から一週間、米国ミズリー州のセント・ルイス市で一九五九年度総会を開催した。参加者は二〇〇〇人を越した。アメリカの各州からはもちろん、ブラジル、カナダ、英国、朝鮮、印度、イラク、サウデ・アラビア、タイ、トルコ、ベトナム、ウエルスなど十一か国からの出席者があった。その内訳をみると、米国側会員約一三〇〇名、国際会員二三名、学生および一般人すなわち会員以外の参加者約四七〇名となっている。

今年の大会では「今日の児童のための基本条件」が研究テーマとして取りあげられた。そして急速度で変化を続ける時代に、種々の心理的圧力の影響をうけて育つ児童の福祉を中心にして問題

が討議された。

先ず、サラ・ローレンス大学学長、ハロルド・テイラー氏が、「今日の児童のための基本条件」と題して講演をした。次はその内容の要約である。

アメリカの教育的考え方について、遺憾な点は進歩的教育がじゅうぶんに徹底しておこなわれていないことである。民主主義の手に世界の指導権を獲得するために、あらゆる力を必要とする時に、教育を国防の道具と考え、人力資源の増強をはかる手段となすことはアメリカ社会を弱化することに外ならない。今、政治、社会、教育の面で進歩的考えを持つことが我々の最大の望みであり、最高の目標である。

では民主主義教育の基本原理とは何であろうか。それは子どもひとりひとりが保護され、愛され、尊重されて、教育によって子どもの能力、才能をじゅうぶんに発揮成長させることである。教育において進歩的考えとは、子どもの実体を把握し、その才能をじゅうぶんに発揮させて、その才能に応じた分野で社会に貢献出来るようにチャンスを与えることである。専制的考えとは、社会がどの方面に人力資源を必要とするかに応じて、子どもを学校で教育することである。これは国や政府によって支配制約をうける教育と、個人を、その可能性をじゅうぶんに成長させる手段としての教育との違いである。今日では、社会の重い圧力が個人の才

能の創造的要素をおしつぶして、社会が企画した枠の中にかためようと働きかけている。今日の子どものための基本条件は先ず国の圧力から個人を守り、個人の才能を育てることである。

とくにソ連陣営との冷い戦争のただ中であって、社会は知的、人間的価値を犠牲にして学問の向上をはかろうとするが、我々は学習の価値を心の成長の方法と考え、この目的のために努力するのである。冷戦カリキュラムを児童におしつけようとする前衛派のひとり、リコーヴァ大將は現代は技術の時代であり、技術専門家が国の発展のために必要であると主張する。そして最強の国は最良の技術専門家を持った社会であるから、アメリカが世界の指導的立場を保持しようと欲するならば、必要とする技術専門家を養成するよう、教育カリキュラムを再編成しなければならぬという。この考えは浅薄な社会的、教育的分析であると言わねばならない。アメリカの学校がヨーロッパやソビエトのシステムと似ていないからと言って、アメリカの学校を非難するのは間違っている。アメリカの教育制度の基本をなすものは民主的進歩的生活態度である。その態度は道徳的価値の修得も意味する。

確かに読む、書くという思想伝達の技術は基本的である。確かに数学、国語、外国語、歴史、理科は基本的である。しかしそれと同じほどに、創作芸術——音楽、劇、舞踊、絵画、彫刻——も自製の技術や道徳的価値の修得も基本的である。教育は子どもや

青年に道徳的、知的挑戦をするもので、道徳の面を無視した教育原理は実際の役に立たない。そして教師は社会的知的指導性に富み、社会の圧力に対してすんで抵抗する意気を持つ必要がある。学校こそはアメリカの理想を実現させるために、個人の権利が最も尊重され、アメリカの民主主義的価値観を学ばせる場であってはならない。

氏は最後に教育の質的向上のための対策を批判して次のように言っている。

「国家防衛教育令」が教育問題を解決するための策として、議会で決議された。一発のロケットが打ち上げられると一〇〇〇万弗ないし一五〇〇万弗がすつとぶこの時代に、国内の大学に対する貸付総額は、わずか六〇〇万弗である。議会が教育の問題の重要性を認めたことを我々は高く評価するけれども、この国の現状が要求している膨大な必要に答えて、大胆な劃期的な対策を發展させない限り、時代が必要とする教育機構を実現することは出来ないことを関係当局へ警告しなければならない。そして、先ず奨学金、学校建築助成、教員給与補助などの形でもっと多額の国庫補助をすべきである。

その他、二、三の講演に続いて、この会の慣例に従って、幾つかの小グループに分散して、研究発表や討論がおこなわれた。取りあげられた問題のうち、主なものを拾ってみると、(1) 児童の

健康、(2) 入学適令期の問題 (3) 天才教育 (4) 働く母親と子ども (5) 理科、数学、外国語の強化 の問題などがある。

先ず健康こそは教育の基本であると主張している。この場合、

健康は、身体的はもちろん、健全な精神生活や道徳生活をも意味している。子どもにとって、この健全な精神生活がもたらす安定感や安心感に欠くべからざるものである。また教室内に落ち着いた健全な雰囲気を作ることは学問の向上と同じように大切なことである。

そのためには健康教育や病予防対策に対する世間一般の関心を高める必要がある、教師・父母の間に健康衛生に関する正確な知識情報を徹底させなければならない。また精神の安定を得るためには競争や勝負を目的とするスポーツよりも、円満なもの、共同精神を養うような性質のスポーツを選ぶことが望ましい。同時に教師の健康が教室内に明かるい雰囲気をかもし出す大切な要素であることを忘れてはいけない。そのためには教師の事務的労働の負担を出来るだけ軽くすることが必要である。また教師が児童から一時的にでも解放される時間を作ることも一案である。

次に入学年令と児童の学業進歩の問題について調査の結果が報告されている。アメリカでは、一九五八年十月の国勢調査によると、六才児の九七パーセントが一学年に、そして五才児の六四パーセントが就学している。これら五才児の中、四六パーセントが幼稚園に一四パーセントが一学年に在学している。一九五四年に

全米教育協会が五四の市立学校を調査した結果によると、幼稚園入園時の年令の中は三才七か月から五才。そのほとんどは九月入園当時、四才八か月から四才九か月である。一年生入学児童の年令の中は五才から六才五か月で、そのほとんどは九月入学当時五才八か月から五才九か月。

調査の結果は決論的なものではないが次のような傾向を示している。(1) 年令だけで就学適令期をきめたり、学業成績の将来の見込みをたてるのは妥当でない。(2) 知能のすぐれている子どもは、身体的、精神的発達も共にすぐれており、学業進歩も著しく、問題は少ない。むしろ平均か平均以下の能力の子どもの場合に問題が多い。知能の発達のおくれた子どもの場合には、入学を少しおくらせることを考えることもよい。(3) 一年生の初期に、それぞれの子童に適応したプログラムに従って、時間をじゅうぶんにかけて、ゆつくりすすめる方がむしろよい教材を詰め込むよりもよい成果をあげることがわかった。一年生として入学する時学校が厳しい詰め込み主義の場合は、児童の入学時の年令が問題となる。その当初の訓練から落伍しないほどの年令に達していなければならぬ。現在の入学年令では学校の現教科内容は少しむずかしくない感がある。反対に子どもの必要と興味に応じて教科内容を決める学校へ入学する場合は、年令が六才かあるいはそれ以下であってもよい。

子どもの欲求と興味を重視するよい幼稚園が小学校へ進学のため
のよいスタートとなることが実証されている。一つの調査によ
ると、幼稚園のない町では、一年生の中、二〇パーセントが進級
出来ないのに比して、幼稚園のある町では、六パーセントが現級
とどまりとなっている。他の研究によると、二年保育の児童の九
二パーセントが読み方能力に関して、標準以上の成績を示してい
るが、幼稚園一年の経験を有する児童についてはやや低く、八〇
パーセントが標準を上回る成績を示している。

入学年齢が問題になる場合、それが子どもの親のフラストレー
ションに原因する場合や、無知の社会が学校に加える圧力による
場合、あるいは子どもの成長発達の原理を実行にうつすことをし
ない学校側の怠慢であったりする場合もあるので、反省が必要で
ある。また子どもの入学適期レディネス *readiness* を測定する
ことは困難である。テスト一つで子どもの身体的、精神的、社会
的、知的発達段階を決めることは出来ない。教師の観察診断、父
母の観察、また父母・教師両方の懇談などから得られた情報、理
解にも基づいて、注意深く検討されねばならぬ。将来、よい幼稚
園の一層の普及と、この問題の調査研究にまつものが多い。

子どもの就学適令に関連して天才児の教育の問題がある。天才
児とは、ある定義によれば、分野の如何にかかわらず、その分野
で一貫して、並すぐれた才能技術を示すものを言う。現在では天

才児を正確にそして容易に鑑別する方法はこれと違ってない。そ
のための標準化されたテストもじゅうぶんでない。天才児の教育
についてよく問題になるのは飛び越し進級や特別学級の是非であ
る。調査によると、学年を飛んで進級させたり、特別学級を設け
るのは天才児教育のための解答ではないといわれている。また早
熟児を早く就学させるのは、親の虚荣心による場合が多く、天才児
の問題の解決にはならない。むしろ教材を豊富にして、選択の自
由をじゅうぶんに与える方が適切である。ひとりひとりの生徒に
適応する級が天才児にもあてはまる級なのである。したがって級
は児童の個人差（天才児も含めて）にそなえて小人数の学級が望
ましく、豊富な教材を揃え、種々の経験を与えることが必要であ
る。また、天才児には、点数、落第、罰などは学問に対する意欲
の刺激とはならない。むしろ子どもの知識欲を奨励して、その努
力の結果を認め、ほめてやる方が効果的であることが示された。

次に働く母親と子どもの問題についてふれてみよう。アメリカ
において労働省婦人局の調べによると、十八才未満の青少年児童
の中で、働く母親を持った者は一一〇〇万人から一六〇〇万人に
およぶという。この子どもたちの保護福祉は大きな問題である。ア
メリカにおいて、婦人は労働力の重要な役割を占めている。現在、
婦人就業者数は二二〇〇万人と言われ、就業者総人口の三分の一
を占めている。ちなみに日本の婦人就業者数は今年一月現在一五

六五万人で、就業者総人口の三八・五パーセントである。我が国では、その数はやや減少の傾向を示しているといわれているが、米国では、一九六五年までにはさらに五〇〇万人の婦人就業者の増加を予想している。このアメリカの婦人就業者の主な職業は、事務関係、サービス業、技術専門業、販売業などで、その中、五三パーセントは、結婚して家庭を持っている。そして七〇〇万人が十八才以下の子どもを持った母親である。さらにくわしく分類するならば、その中の四五〇万人が学令期の子ども（六才—十六才）を持ち、二五〇万人が六才以下の子どもを持っている。そして十二才未満の子ども、四〇万人が身のまわりの世話を自分の手でしなければならぬ状態にあるという。また六才以下の幼児の中、わずか五パーセントが幼稚園あるいは保育所で世話をうけている。

母親が働く理由として、未亡人となったため、仕事がおもしろいから、夫の収入を補うため、家計に経済的余裕をもたせるため、あるいは社会の要求に応じるためなどがあげられている。アメリカの産業工業はこれらの婦人就業者を必要とする。同時に未来の社会のため、子どもも必要とする。が婦人は子どもの福祉を犠牲にして産業に工業に貢献すべきだろうか。母親が働きながら子どもに適切な養育をほどこすのは容易なことではない。したがって、学校、教会、産業・工業界がもっと積極的に子どもの保護福祉の間

題を取りあげるべきである。学校では、教師は父母と密接な連絡をとって、各家庭の具体的問題の解決から先ず始める必要がある。

最後に近代化された社会生活に特有の緊張感が子どもの精神生活に及ぼす悪影響が挙げられている。スパットニック以来、ソビエトが科学技術の面でアメリカにまさっているというので、アメリカの学校教育に批判の目がむけられ同時に圧力が加わってきた。そして、とくに理科、数学、外国語を小学校で強化することとなった。そのため教科内容はバランスを失って、教師児童共に、一層の緊張感の虜となった感がある。教師は教科内容が調和のあるものであるよう、研究資料を参考にして今一度検討することが必要である。

その他、創作活動についての研究会もあった。そして来年度の総会では (1) 学校社会における圧力 (2) 学令前の教育 (3) 調和のある教育課程のテーマを取りあげて研究することを決議して散会した。地理的には、おたがい遠く離れている人々も、この総会では、子どもの教育という同じ目的のために、一つ心に結ばれて、研究に熱中した。この会の成果は参加者が各々の地方の社会で、あるいは学校で、この会を通して学んだ新しい知識と経験が子どもの基本問題のより深い理解となって実現された時、はじめて評価され得る。ACEIの努力は明日の子どもの健全な成長を目指している。

(津田塾大学)